Title	海外帰国生の喫煙に関する調査研究 : 喫煙の実態・意識と習慣化の要因分析
Author(s)	鈴木, 明
Citation	聖学院大学論叢, 2: 163-182
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=1122
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

海外帰国生の喫煙に関する調査研究

——喫煙の実態・意識と習慣化の要因分析——

鈴　木　　明

A Study of the Smoking Habits of Overseas Returnee Students

—Smoking Awareness and Factors Related to Acquiring the Smoking Habit—

Akira SUZUKI

1) Among returnees 25.1% of male students and 7.3% of female students have smoked more than one or two cigarettes. Compared to schools in Japan, the rates are slightly higher for female returnees, and for students in general from Japanese overseas schools.

2) Smoking often begins in the ninth or tenth grade out of curiosity and peer pressure. Smoking habits are acquired within a short time span.

3) Acquisition of the smoking habit is correlated to and strongly influenced by the smoking habits of friends, teachers, and particularly family members.

4) Correlated to smoking are drinking of alcoholic beverages, staying up late at night, driving into dangerous neighborhoods and other problematic behavior patterns.

5) Anti-smoking education is effective among groups of non-smokers.

6) Anti-smoking education is most effective in the early grades before students actually experience smoking. However, depending on the curriculum it can be effective even among smokers in highschool as well.

Ⅰ．はじめに

1988年度の厚生省の喫煙と健康問題に関する報告書[9]によると，わが国の成人喫煙率は男性の場合，1965年の83.7％がもっとも高かったが1986年には62.5％まで低下している。これに対して女性の場合は，1965年の18.0％を最高に以後は15.0％前後であり，1986年には12.6％と低下している。しかし反面，20歳代の喫煙率は逆に増加の傾向がある（図１）[11][12][13]。しかしながらわが国の男性の場合，喫煙率が低下しているものの，欧米各国と比較すると先進国の中では喫煙率はきわだって高

Key words; Overseas Returnee Students, Actual Condition and Awareness of Smoking, Quantification theory Ⅱ, Anti-Smoking Education

いものである。

喫煙が人体にとって有害なのは事実である[1][3][8]。WHO 専門委員会および喫煙制圧専門委員会（WHO Expert Committee on Smoking Control）は喫煙による健康障害として，腎臓ガンを除くすべてのガン，気管支炎，肺気腫，虚血性心疾患，胃潰瘍などをあげている[19][20]。最新の研究成果をふまえた WHO の報告[18]でも，「たばこ煙は人に対して発がん性がある」という結論に達している。

平山の調査によると[4]，非喫煙者に比べて喫煙者のガン死亡率は，男性の場合，喉頭ガンで32.0倍，肺ガン4.4倍，咽頭ガン3.1倍などほとんどのガンで死亡率が高い。また喫煙開始年齢が早ければ早いほどその危険率も高く，15歳未満で喫煙を開始した者の総死亡率は，非喫煙者の1.8倍であり，虚血性心疾患は3.7倍，ガンでは2.7倍に達している。

1988年11月に東京において第6回喫煙と健康世界会議が開催され，これを契機に喫煙と健康問題に関して国民の関心は今後ますます高まっていくことと期待される反面，たばこの生産高と外国の輸入たばこは増加している[10]。中・高年者の喫煙率が減少していることをあわせて考えると，若年層および全国的な規模の調査が行われていない未成年者の喫煙率が増加していると推測される。一部の報告では，未成年に限っては数の増加に加え，喫煙年齢の低下という現象を呈している。喫煙

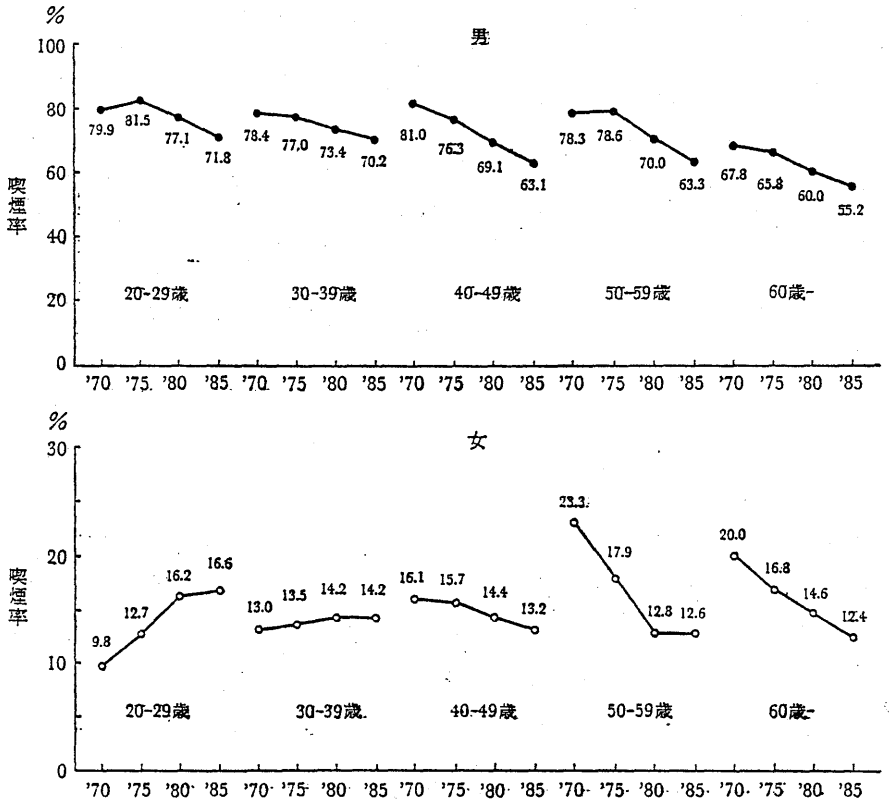

図1．年齢段階別の喫煙率の年次推移[11][12][13]

年齢の低下は健康面はもちろん，社会的な面からも問題が多くなってきている。

これまで喫煙が身体に及ぼす影響については比較的研究が進んでいるが，喫煙を開始するメカニズムについては十分には研究されているとは言えない。しかしながらこれから喫煙を始めようとしている生徒に対して健康教育を実施する場合，このメカニズムを把握しておくことは必要不可欠である。喫煙の害についてはすでに証明されているし，とくに若年よりの喫煙の害の大きさは強調しすぎることはないと思われる。現在，生徒の喫煙は学校教育においても現実的に直面している最も大きな課題の一つである。

本研究は，未成年者である高校生の中でとりわけ環境の異なる海外帰国生に注目し，彼らの喫煙の実態・意識を明らかにし，国内の一般高校生のそれと比較検討することにより，非喫煙者が喫煙に至るまでのメカニズムを解明し，喫煙行動に関与する心理的・社会的要因や，われわれをとりまく種々の影響因子がどのように影響していくかを計量的に評価し，最終的には喫煙の行動の要因モデルを構築することで，より効果的な健康教育のあり方についての考察を試みることを目的としている。そこで今回は彼らの喫煙状況について調査を行ない，彼らをとりまく生活環境が彼らの喫煙行動の認識にどのように影響しているかを調査研究し，若干の知見を得たので報告する。

Ⅱ．調査方法

調査対象は海外帰国子女受け入れ校である東京都下のＫ高校，京都府下にあるＤ高校，埼玉県下のＷ高校の３校である（Ｗ高校の調査対象は任意抽出）。Ｋ高校およびＤ高校は全日制の男女共学の私立高校であり，Ｗ高校は全日制の男子校である。調査は1986年５月から11月にかけて質問紙法を用いて行なった。そして，その内容を喫煙経験者グループ（以下，喫煙群と記す）と非喫煙経験者グループ（同，非喫煙群），場合により海外帰国生と国内出身者（以下，一般生と記す）に区分し比較検討した。調査対象の人数は表１のとおりである。回収率は78.9％であった。

なお，海外帰国生とは各学校においてそれぞれ認定された者をいう。認定方法は各学校で多少の違いはあるが，おおむね２年以上の海外在留経験をいう。また海外帰国生には現地校出身者と海外日本人学校出身者の両者を含む。本調査の出身学校の所在国は56ヶ国で，そのうちの41.7％はアメ

表１　対象人数　（人）

		学年	1　年		2　年		3　年	
		性別	男子	女子	男子	女子	男子	女子
帰国生	現地校出身者	662	98	153	90	153	58	110
	日本人学校出身者	227	62	37	54	26	33	15
一般生		362	57	76	76	76	38	39

リカ合衆国の出身者であった。

Ⅲ．結果並びに考察

(1) 喫煙の実態

喫煙経験者（1～2度いたずら程度に吸った者は除く）は男子の場合，学年別では1年生が21.3%（34/160），2年生が20.1%（29/144），3年生が39.6%（36/91）で全体では25.1%（99/395）であった。女子の場合は，1年生が4.7%（9/190），2年生が7.8%（14/179），3年生が10.4%（13/125）で全体では7.3%（36/494）であり，男子は3年生になって急増し，女子は学年が上がるにつれて増加している（表2）。帰国生の中でも，日本人学校と現地校出身者を比較すると，日本人学校出身者の方に多くみられた。同時に行った一般生との比較では，男子の場合はほとんど同じであるが，女子の場合はやや喫煙率が高い。この値は3年前に同じ対象校で行った調査と比較すると，ほとんど横ばいであるが1年生の男子の喫煙率の増加が目立った。高校生の喫煙調査は，地域差，学校差があり，また調査方法によってかなりの差があり比較することが難しいが，富永[17]や川畑[7]，伊藤[6]などの調査と比較すると喫煙率はやや高いと思われる。

喫煙開始に関わる要因を表3～8に示した。喫煙は中学生になって増加するが，ピークは中学3年から高校1年時である。男子の場合，3年生に比べ1年生の方が喫煙開始学年が低く，喫煙開始年齢は下がっている。また今回は女子の喫煙開始学年が男子に比べ早いのが目立つ。

始めての喫煙時の動機は，男子が「何となく興味がある」，次いで「友人にすすめられて」で，女子は「何となく興味がある」，「イライラしていたから」で，動機に関しては男女間に有意な差が認められた（$P<0.05$）。女子の場合，男子に比べ「イライラしていたから」という動機をあげる者もあり，精神的に不安定な時に喫煙行動に及ぶ可能性があると考えられる。初めてのたばこは友人から貰う場合が49.0%と半数近い。「何となく興味がある」が多いが，初めてたばこを吸う時は動機がはっきりした意識によるものではないので記憶が定かでないのかもしれない。また以前に比べ「友人にすすめられて」という項目が増加しており，喫煙に対し友人の影響が強いことがわかる。喫煙経験者のうち現在の喫煙者は表6のとおりである。女子の方にはすでに5割近くの者が喫煙を止めている。また喫煙継続者のうち，習慣化している者は男子46.5%，女子27.8%である。これら喫煙継続者のたばこを吸う程度は，毎日吸う者が半数近くを占め，高学年になるほどその数が増えている。1週間の喫煙本数は半数近くが10本までであるが，3年生になると喫煙本数が急激に増加する。喫煙場所は喫茶店や自宅が多い。

喫煙の継続に関わる要因は表9～19に示した。喫煙の理由は「ストレスが解消し，気持が落ち着く」という者が多く，次いで「たばこがうまいから」で男女とも同じ傾向にあった。Ikard[5]やRussell[14]などの分類でみると鎮静的喫煙が多いが，とくに男子の方では「たばこがうまいから」

と回答する，いわゆる道楽的喫煙者が学年が上がるにつれて増えている。高校生で「たばこがうまいから」という回答はこれまでの調査では見られなかった傾向で，たばこの味まで喫煙理由としてあげていることが注目される。女子にも「たばこがうまいから」という回答が急増している。

喫煙が習慣化するまでの期間は1ヶ月未満が多い（表10)。これまでの調査と比較すると常習化までの期間が短い。喫煙開始後3ヶ月ですでに半数近くの者が，喫煙本数の差はあるものの習慣化するわけであり，禁煙教育を行う場合，喫煙を経験する前に実施することが望ましい。

たばこの害については，男子83.5%，女子97.0%が有害だと考えている（表11)。女子においてはほとんどの者が有害とわかっていて喫煙している。喫煙の害は「時々その害を気にしながら吸っている」者が多く，「いつも気にしながら吸っている」者をあわせると大部分の者がたばこの害を気にしながら吸っている。これは一般生に比べて多い。

タバコをできればやめたいと思っているものは男子62.2%，女子54.8%で，その理由の中では「有害であるから」という者が多いが，以前に比べ禁煙したい者の割合が減少している。また，や

表2　喫煙の有無(「ある」と答えた者)　(%)

	男子	女子
1　年	21.2	4.7
2　年	20.1	7.8
3　年	40.0	10.4
P	※※※	※

(1～2度いたずら程度に吸った者は除く)

※※※　P<0.001
※※　P<0.01
※　P<0.05

表3　喫煙開始時期　(%)

区分 / 項目	男子							
	1年		2年		3年		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学校5年　まで	10.2	20.0	4.9	16.7	4.0	12.9	7.1	13.2
6年	16.3	10.0	7.6	16.7	3.0	13.3	5.1	13.2
中学校1年	13.2	20.0	15.9	22.2	12.0	0	13.3	13.2
2年	18.0	30.0	12.7	22.2	13.0	6.7	13.3	18.4
3年	29.7	20.0	17.6	5.6	16.0	20.4	25.4	18.4
高　校1年	12.6	0	26.9	16.7	20.0	13.3	22.4	10.5
2年	…	…	14.5	0	20.0	26.7	12.2	14.5
3年	…	…	…	…	12.0	6.7	5.1	2.6

められない理由は多岐にわたっている。

健康面への影響は，「全くなかった」者が男子43.0%，女子60.7%であるが，「かなりあった」者も男子18.6%，女子7.2%見られた。男女間においては，女子にその影響が弱いが，一般生とは対照的である。また喫煙が「他人に迷惑を及ぼしている」と感じている者は男子47.3%，女子31.3%であった。以前に比べ「他人に迷惑を及ぼしている」という者が減少している。

喫煙については「両親とも知っている」者が男子39.6%，女子31.3%で，喫煙を認められている者は男子18.2%，女子10.3%である。親から注意される者は7割程度である。

表4　初回喫煙の動機　(%)

項目 ＼ 性別 / 入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
友人にすすめられて	22.2	31.9	8.6	16.7
イライラしていた	17.2	10.6	22.9	16.7
その場の雰囲気から	10.1	10.6	5.7	0
何となく興味があって	31.3	17.0	22.9	16.7
カッコをつけるため	4.0	6.4	5.7	0
友人が吸っているのをみて	6.1	8.5	11.4	16.7
親が吸っているのをみて	2.0	0	0	0
大人になった感じ	0	0	2.9	16.7
その他	8.1	15.0	20.0	16.5
P				

表5　初めてのたばこの入手経路　(%)

項目 ＼ 性別 / 入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
友人から	49.0	55.3	50.0	16.7
親のもの	9.0	10.6	16.7	33.3
兄弟のもの	1.0	0	0	0
自動販売機から	14.0	19.1	8.3	33.3
たばこ屋の店頭から	21.0	6.4	19.4	0
その他	6.0	8.6	5.6	16.7
P				

表6-1　現在の喫煙　(%)

項目 ＼ 性別 / 入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
吸っている（習慣化している）	46.5	57.4	27.8	66.7
時々吸っている（習慣化していない）	29.3	23.4	22.2	16.7
以前は吸っていたが現在は吸っていない	24.2	19.2	50.0	16.6
P			※	

表6-2　喫煙の程度　(%)

項目 ＼ 性別 / 入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
ほとんど毎日	53.8	60.5	31.3	50.0
ときどき	17.6	18.6	31.3	33.3
たまに	27.5	20.9	25.0	16.7
その他	1.1	0	12.4	0
P				

表7　一週間の平均喫煙本数　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
10本まで	48.3	30.2	61.3	33.3
30本まで	16.9	30.2	12.9	16.7
70本まで	16.9	16.3	12.9	0
140本まで	10.1	14.0	9.7	50.0
140本以上	7.8	9.3	3.2	0
P				

表8　おもな喫煙場所　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
喫茶店	23.1	26.8	32.3	33.3
自宅	23.1	34.1	25.8	16.7
友人宅	5.5	4.9	12.9	0
路上	8.8	17.1	16.1	0
寮や下宿	22.0	7.3	0	0
学校	1.1	0	0	33.3
塾や予備校	1.1	0	0	16.7
その他	15.3	9.8	12.9	0
P	※		※※	

表9　喫煙理由　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
ストレスが解消し気持ちが落着く	35.2	27.9	40.6	50.0
吸っているとカッコイイ	1.1	2.3	3.1	0
たばこがうまい	23.1	37.2	25.0	0
理由はないが習慣になっている	14.3	11.6	3.1	0
ただ何となく	17.6	16.3	18.8	33.3
吸えないと友達にバカにされる	0	2.3	3.1	16.7
その他	8.7	2.4	6.4	0
P				

表10　習慣化までの期間　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
1ケ月未満	28.2	25.0	28.6	33.3
3ケ月未満	16.5	20.0	17.9	16.7
6ケ月未満	4.7	7.5	3.6	0
6ケ月以上	18.8	20.0	10.7	16.7
習慣化していない	31.8	27.5	39.2	33.3
P				

表11　たばこを有害だと思うか　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
思う	83.5	78.0	97.0	16.7
思わない	4.4	9.8	3.0	50.0
わからない	12.1	12.2	0	33.3
P			※※※	

表12　たばこの害について　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
いつも気にしながら吸う	22.8	11.6	28.1	16.7
ときどき気にする	59.8	51.2	46.9	16.7
全然気にならない	17.4	37.2	25.0	66.6
P	※※		※	

表13　たばこをやめたい理由　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
有害である	64.8	57.1	52.6	100.0
見つかると処分される	7.4	4.8	10.5	0
罪悪感	13.0	0	15.8	0
お金がかかる	7.4	78.1	15.8	0
親がうるさい	1.9	0	5.3	0
その他	5.5	0	0	0
P	※			

表14　やめられない理由　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
意志が弱い	23.4	40.9	26.7	50.0
キッカケがつかめない	36.2	22.7	13.3	0
その他	40.3	36.4	60.0	50.0
P				

表15　健康面への影響　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
全くなかった	43.0	41.5	60.7	66.7
わずかにあった	38.4	39.0	32.1	16.7
かなりあった	18.6	19.5	7.2	16.6
P				

表16　自分のたばこが他人に迷惑をかけていると思うか　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
思う	47.3	32.6	31.3	33.3
思わない	25.3	44.2	40.6	50.0
わからない	27.4	23.3	28.1	16.7
P				

表17　親はあなたの喫煙を知っているか　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
両親とも知っている	39.6	53.5	31.3	66.7
母親だけ知っている	5.5	7.0	12.5	16.7
父親だけ知っている	4.4	2.3	6.3	0
知らない	23.1	30.2	40.6	16.6
その他	27.5	7.0	9.4	0
P	※			

表18　たばこを吸うことを認めているか　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
認めている	18.2	19.0	10.3	50.0
認めていない	46.6	54.8	62.1	33.3
家の中でのみ認めている	2.3	2.4	3.4	0
家の外でのみ認めている	5.7	2.4	17.2	16.7
わからない	23.9	16.7	3.4	0
その他	3.3	4.7	7.6	0
P			※	

表19　両親からの注意　（%）

項目＼性別・入学区分	男子		女子	
	帰国生	一般生	帰国生	一般生
よくする	37.8	22.2	56.3	0
たまにする	28.9	48.1	12.5	25.0
ほとんどしない	26.7	29.7	31.2	75.0
知らないふりをしている	6.6	0	0	0
P			※	

(2)　喫煙群と非喫煙者群の比較

1）まわりの喫煙環境の影響

喫煙群と非喫煙者群において，周囲の喫煙環境から比較検討した（表20～表24）。「父親の喫煙の有無」は，女子の喫煙に影響がみられ，喫煙群の女子の方の父親の喫煙率が高かった。逆に非喫煙群の父親にはたばこをまったく吸わない父親が多かった。一般生と比較してみると，帰国生の父親の喫煙率は低い。「母親の喫煙の有無」は男女とも喫煙群の母親の喫煙が高いものの，有意な差は認められなかった。

しかし，家族の喫煙環境をみると，喫煙群と非喫煙群において差がみられ，男女とも喫煙群には家族がほとんどの喫煙者であり，非喫煙群においては誰も吸わない者の割合が多いのが特徴であった。このような傾向は身近な友人の喫煙にもみられ，喫煙群では，まわりに喫煙する者が多く，非喫煙群には吸わない者が多い。このことはとくに女子の非喫煙群に顕著に現れている。また女子の場合，一般生と比較すると，「ほとんどの者が吸わない」と答えているのは一般生に多い。このことから，帰国生では友達の集団が喫煙群と非喫煙群の２つに分れていると推測され，喫煙の有無が仲間集団の形成に多少の影響を与えていると考えられる。

学校の教師の喫煙の有無の影響については表24に示した。男女とも，喫煙群の方に教師が生徒の前で喫煙することが多くみられた。ことに男子の場合，小学校・中学校・高校とすべての学校で有意な差が認められた。中学校の教師の喫煙は，一般生の喫煙群ではみられない特徴であり，帰国生の場合，一般生に比べ，外国での学校経験から，教師―生徒の関係がより強く，教師の影響が喫煙に及んでいるのかも知れない。一方女子は，高校の教師の喫煙の有無がその生徒の喫煙に影響している。また本報告から少しはずれるが，小・中学校の教師が生徒の前で喫煙する割合が高い（とくに一般生の出身校に多い）ことは憂慮されることである。

このように高校生の喫煙に関しては，まわりの環境（本人をとりまく喫煙者の有無）が大きく影響している。まわりの環境には家族や友人はもちろんであるが，教師の喫煙の有無も関与している。

表20　父親の喫煙　(%)

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
喫煙している	35.4	35.4	34.2	45.7	35.5	47.9	34.9	44.1
喫煙の習慣があったがこのところ禁煙している(1年未満)	4.1	3.0	4.4	5.7	3.8	3.6	4.4	2.7
喫煙の習慣があったが1年以上禁煙している	18.7	19.2	17.3	20.0	18.8	13.0	17.6	13.8
たばこは吸わない	39.1	39.4	41.0	28.6	39.1	32.5	40.2	35.6
わからない	0.7	1.0	0.7	0	0.8	1.2	0.6	2.1
その他	2.0	2.0	2.4	0	2.0	1.8	2.3	1.7
P			※		※			

表21　母親の喫煙　(%)

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
喫煙している	3.7	8.1	5.7	11.4	4.8	13.0	6.0	7.9
喫煙の習慣があったがこのところ禁煙している(1年未満)	0.7	0	0.9	0	0.5	0	0.8	0.5
喫煙の習慣があったが1年以上禁煙している	2.4	1.0	1.3	2.9	2.0	1.2	1.4	1.6
たばこは吸わない	89.8	86.9	90.2	85.7	88.9	84.0	89.9	89.5
わからない	1.7	1.0	0.7	0	1.5	0.6	0.6	0.5
その他	1.7	3.0	1.2	0	2.3	1.2	1.3	0
P					※※			

表22　家族の喫煙割合　(%)

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
ほとんど家族全員	3.8	11.1	4.2	11.4	5.8	11.5	4.7	8.0
ほとんど吸っていない	42.6	43.3	44.1	51.4	42.4	46.1	44.4	47.9
誰も吸わない	53.6	45.6	51.7	37.1	51.8	42.4	50.9	44.1
P	※		※		※※		※	

表23　身近な友人の喫煙　（%）

区分 / 項目	海外帰国生 男子 N群	海外帰国生 男子 S群	海外帰国生 女子 N群	海外帰国生 女子 S群	男子 帰国生	男子 一般生	女子 帰国生	女子 一般生
ほとんどの者が吸う	7.8	35.4	0.7	11.1	14.7	19.3	1.4	1.6
ほとんどの者が吸わない	26.8	1.0	57.7	13.9	20.3	15.2	54.7	63.8
吸う者もいるし，吸わない者もいる	61.0	62.6	35.0	75.0	61.5	63.7	37.9	31.9
その他	4.4	1.0	6.6	0	3.5	1.8	6.0	2.7
P	※※※		※※※				※※	

表24　教師の喫煙の影響（「はい」と答えた者の割合）　（%）

区分 / 項目	海外帰国生 男子 N群	海外帰国生 男子 S群	海外帰国生 男子 P	海外帰国生 女子 N群	海外帰国生 女子 S群	海外帰国生 女子 P	男子 帰国生	男子 一般生	男子 P	女子 帰国生	女子 一般生	女子 P
小学校時代，先生はあなたの前でタバコを吸いましたか	50.2	62.0	※	51.0	50.0		53.1	65.3	※※	50.9	68.9	※※※
中学校時代，先生はあなたの前でタバコを吸いましたか	61.9	71.7	※	69.1	72.2		64.3	77.1	※※	69.4	80.4	※※
高校で，先生はあなたの前でタバコを吸いますか	42.0	59.8	※※	57.6	83.3	※※	46.5	52.7		59.2	49.2	※※

2）禁煙教育の影響

表25はこれまで学校で受けた喫煙と健康に関する授業が，どの程度自身の喫煙に対する意識に影響しているかをみたものである。「何の影響もなかった」という者は喫煙群に多くみられ，非喫煙群は「これからもたばこを吸わない決心に影響を与えた」という者が多くみられた。この影響はとくに女子に顕著であった。したがって禁煙教育は，喫煙未経験者に対しては有効な手段であると考えられる。また授業によっては，喫煙群の中にも「禁煙という決心に影響を与えた」者が女子では12.1%（男子は4.3%）みられた。

喫煙の害について知る方法については，「ラジオやテレビ」をあげる者も多いが，「教室での学習」をあげる者も少なくない。女子の喫煙群は「パンフレットやポスター」を示している。一般生との比較では，帰国生の男子に「教室での学習」を指示する者が多い。男女別では女子に「映画」や「ラジオやテレビ」などの視聴覚を希望する者が多い。

最も恐れている病気は喫煙群と非喫煙群の間に有意差がみられたが，非喫煙群は「肺がん以外のがん」や「脳卒中」をあげる者が多く，喫煙群は「肺がん」が多い。喫煙者には，喫煙＝肺がんの認識が強いように考えられる。

「中学校の保健の授業がきちんと行われていたか否か」の影響は表33に示した。女子の喫煙群と非喫煙群間に有意な差が認められ，非喫煙群の方に保健の授業がきちんと行われている割合が高い。男子の場合，「保健または保健に関する授業への関心」は喫煙群の方が高いし，同様に「ふだん健康についてよく考える」者の割合も高い。さらに，たばこの知識や，喫煙の害に対する興味も多く

表25　これまで学校で受けた喫煙と健康に関する授業の影響度　(%)

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
何の影響もなかった	41.6	53.8	39.3	51.5	44.7	60.9	40.0	35.1
そのような授業を受けたことがなかったので，何の影響もなかった	24.8	34.4	15.8	21.2	27.1	18.3	16.3	20.0
これからもたばこを吸わないという決心に影響を与えた	27.7	7.5	41.5	15.2	22.6	15.4	39.8	42.7
禁煙という決心に影響を与えた	5.9	4.3	3.3	12.1	5.6	5.4	3.9	2.2
P	※※※		※※		※※			

表26　喫煙の害の影響について知る方法　(%)

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
映画	14.4	11.3	15.2	5.6	13.6	11.2	14.4	11.7
教室での学習	16.1	17.5	18.6	13.9	16.4	8.9	18.5	16.0
新聞	12.7	17.5	13.4	13.9	14.1	14.2	13.3	16.5
ラジオやテレビ	31.2	28.9	35.3	25.0	30.5	34.3	34.3	41.0
パンフレットやポスター	7.5	5.2	8.1	16.6	6.9	4.7	8.6	5.2
その他	18.1	19.6	9.4	25.0	18.5	26.7	10.9	9.5
P			※※		※※			

表27　最も恐れている病気　(%)

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
肺がん	13.9	29.8	16.6	34.3	18.0	13.5	18.2	13.6
糖尿病	6.9	4.3	4.7	2.9	6.3	6.7	4.5	5.4
心臓疾患	12.2	9.6	7.9	11.4	11.5	9.2	8.3	12.5
脳卒中	17.4	12.8	11.0	11.4	16.2	12.3	11.0	15.2
肝臓病	3.5	4.3	2.0	2.9	3.7	4.9	2.1	3.8
肺がん以外のがん	16.0	12.8	36.0	25.7	15.1	21.5	34.9	31.5
その他	30.1	26.4	21.8	11.4	29.2	31.9	21.0	18.0
P	※		※※					

表28　たばこの害についての知識　（%）

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
かなり詳しく知っている	13.6	20.7	3.1	36.1	15.2	14.6	5.7	8.9
だいたい知っている	57.6	47.8	66.4	50.0	55.4	63.7	64.8	57.9
あまり知らない	24.4	25.0	27.0	11.1	24.5	18.1	25.9	29.5
ほとんど知らない	4.4	6.5	3.5	2.8	4.9	3.6	3.6	3.7
P			※※※					

表29　たばこが影響すると考えられる病気に対する興味　（%）

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
かなりあった	8.9	17.4	8.8	13.9	10.9	10.1	9.1	15.3
多少あった	46.9	48.9	52.3	52.8	47.5	44.4	52.2	44.2
ほとんどなかった	44.2	33.7	38.9	33.3	41.6	45.5	38.7	40.5
P	※						※	

持っている。したがって，禁煙教育は，その内容や方法によってはもっと効果が現れると思われるので，きちんとやるのはもちろんであるが，その内容の検討が今後の課題である。

3）たばこに対する意識

たばこに対する意識をきいたものが表30である。喫煙群と非喫煙群でみた場合，「嫌煙権運動に賛成」の項目に男女とも有意な差が認められた。非喫煙群に多くの賛成がみられたが，以前に比べ「嫌煙権運動に賛成」の者の割合が多い。嫌煙権ということばが，日常使われるようになったので嫌煙権ということばが浸透した結果であると考えられる。

「医者はたばこを吸わない模範を示すべきである」，「教師はたばこを吸わない模範を示すべきで

表30　喫煙（者）に対する意識（「はい」と答えた者の割合）　（%）

区分 / 項目	海外帰国生											
	男子			女子			男子			女子		
	N群	S群	P	N群	S群	P	帰国生	一般生	P	帰国生	一般生	P
医者はタバコを吸わない模範を示すべきだと思うか	59.1	37.0	※※※	59.9	55.6		53.6	42.0	※※	59.5	47.1	※※
教師はタバコを吸わない模範を示すべきだと思うか	54.3	40.9	※	48.1	47.2		50.9	37.9	※※	48.0	44.4	
両親がタバコを吸う場合，親はその子供の喫煙を許すべきだと思うか	38.7	43.2		32.1	50.0	※	39.7	41.0		33.4	30.9	
嫌煙権運動に賛成	66.2	31.8	※※※	74.2	52.9	※※	57.9	54.6		72.7	77.5	
10代の人の喫煙は身近な友人が吸っているからだと思うか	64.7	68.2		63.2	66.7		65.3	61.0		63.5	60.7	

ある」という問いには，男子の喫煙群と非喫煙群間に差がみられ，非喫煙群に医者や教師の禁煙の模範を求める者が多い。しかし女子にはこの傾向はみられない。このことを一般生と比較すると，医者については男女とも，教師については男子に有意な差が認められ，帰国生の方に模範を示すべきとの声が強い。また「両親がたばこを吸う場合，親はその子供の喫煙を許すべきだと思うか」という問いには，女子の喫煙群に許すべきだという回答が多くみられた。このことは，女子の喫煙に関して，喫煙者の親が自分の娘の喫煙に対して喫煙を止めさせることは難しいことを示している。総じて喫煙群は他人の喫煙に寛容で非喫煙群は喫煙にきびしいが，男子はことに他人の喫煙にきびしい。また，女子は親の行動を模倣する傾向にある。

高校生の喫煙に対する意識は，喫煙群の多くは「吸いたい人は勝手に吸えばよい」という回答が多く，非喫煙群は「絶対にやめるべきだ」という者が多い。

吸っている仲間への注意は「相手によって注意する」者が非喫煙群のことに女子に多くみられる。また下級生の方に多くみられる。男子の場合，喫煙群と非喫煙群間に差が認められる反面「注意したいと思わない」という者も半数以上いる。ただ男子の場合，一般生に比べると「相手によって注

表31　高校生の喫煙に対しての意識　（%）

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
法律でも禁止されており絶対やめるべき	21.8	6.5	26.3	2.8	18.1	15.8	24.5	28.9
吸いたい人は勝手に吸えばよい	63.3	79.3	54.3	86.1	67.2	70.8	56.8	46.3
よくわからない	9.5	6.5	12.8	8.3	8.8	9.9	12.4	14.7
その他	5.4	7.7	6.6	2.8	5.9	3.5	6.3	10.1
P	※		※※					

表32　たばこを吸っている仲間を見た時の注意　（%）

区分 / 項目	海外帰国生							
	男子		女子		男子		女子	
	N群	S群	N群	S群	帰国生	一般生	帰国生	一般生
見ればかならず注意する	3.7	2.2	5.4	5.6	3.4	3.0	5.3	4.3
相手によって注意することもある	31.0	22.6	53.4	22.2	28.9	17.8	50.6	46.8
注意したこともあるが現在は注意しない	8.5	7.5	7.0	5.6	8.2	10.1	6.8	7.5
注意したいと思うがとてもできない	5.1	4.3	9.4	2.8	4.9	6.5	9.1	7.0
注意したいとは思わない	51.7	63.4	24.8	63.8	54.6	62.6	28.2	34.4
P	※		※※※		※			

意する」者は多い。全体的にみると，喫煙群は「注意したいと思わない」，非喫煙群は「相手によって注意する」傾向がある。帰国生，とくに女子は「見れば必ず注意する」，「相手によって注意する」が多いが，これは相手に対しはっきりと物事を言う帰国生特有の現象である。

喫煙群には［たばこ・喫煙］というものに対して肯定的であり，非喫煙群では［たばこ・喫煙］には否定的である。しかしながら，非喫煙群のそれば，医学的な喫煙の害に対する受動的喫煙（Passive Smoking：非喫煙者が自らの意志に反して，または無関係にたばこの害に曝露され吸煙を強いられている状態[2]）に対してではなく，生理的に嫌いまたは無関心な者が多い。

4）喫煙に関与する行動

喫煙に関与すると思われる行動[16]について，喫煙群と非喫煙群とに比較して表33に示した。

成人の場合，飲酒と喫煙は相関があるといわれているが，高校生の場合も男女とも飲酒において影響がみられた。すなわち「飲酒の経験」があると答えた者は，男子の喫煙群で96.8％（非喫煙群は83.7％），女子で97.2％（同84.4％）であった。このうち「よく酒を飲む」者は，男子の喫煙群で63.4％（非喫煙群20.4％），女子では58.3％（同14.7％）と大きな差がみられ，またこれに加え「しばしば夜ふかしをする」者は男女とも喫煙群に多くみられた。「朝食を毎日とる」者は男女とも非喫煙群に多いが，喫煙群は「しばしば夜ふかしをする」者が多いのでその結果朝食をとらない者が多いと推測される。非喫煙群では「睡眠を十分にとっている」者が多い。「不健全な場所に近づ

表33　日常生活行動（「はい」または「ある」と答えた者の割合）　（％）

区分 / 項目	海外帰国生											
	男子			女子			男子			女子		
	N群	S群	P	N群	S群	P	帰国生	一般生	P	帰国生	一般生	P
飲酒の経験の有無	83.7	96.8	※※	84.4	97.2	※	86.9	85.9		85.5	82.1	
よくお酒を飲む	20.4	63.4	※※※	14.7	58.3	※※※	30.9	35.9		17.7	18.9	
しばしば夜ふかしをする	66.2	89.2	※※※	71.5	94.4	※※	71.8	70.6		73.4	73.7	
新聞の健康に関する記事をよく読む	24.7	33.7	※	29.6	22.2		27.0	30.0		29.0	34.2	
親しい異性の友達がいる	33.3	57.6	※※※	43.4	74.3	※※※	39.3	39.3		45.3	38.7	
睡眠を充分とっている	56.4	43.2	※	50.4	38.9		53.5	51.2		49.8	53.8	
中学のとき保健または保健に関する授業はきちんとおこなわれていた	58.3	59.8		67.4	52.8	※	58.5	67.9		66.4	70.4	
保健または保健に関する授業に関心があった	28.5	47.7	※※※	41.4	38.9		32.8	32.9		41.5	38.9	
ふだん健康についてよく考える	52.1	65.9	※	58.4	47.2		55.4	49.1		57.1	51.1	
マリファナの経験	5.5	27.2	※※※	1.5	22.9	※※※	10.6	5.9	※	3.0	3.2	
不健全な場所に近づかないようにしている	61.5	29.5	※※※	76.7	48.6	※※※	39.4	32.1		52.1	52.7	
朝食を毎日食べる	83.3	70.1	※※	87.7	77.8	※	80.3	82.4		87.1	87.1	

かない」者は男女とも非喫煙群に多い。このように喫煙群には未成年の行動として問題となる行動が多くみられた。

喫煙群では非喫煙群に比べ「新聞の健康に関する記事をよく読む」者が多く，「ふだん健康についてよく考える」者も多い。この傾向は大学生の調査でも同じような傾向がみられた[15]。喫煙群にはその意識の中で病気などに対する関心は高いが，しかしながら実際に健康に対してよく考えて実践しているかは疑問である。

さらに帰国生という背景を考えて，「マリファナを吸ったことがあるか」という問いに対して，全体の中では「ある」と答えた者が男子で10.6%，女子で3.0%みられた。喫煙群に限っていうと，男子で27.2%，女子で22.9%と非喫煙群に比べかなり高い。ほとんどがアメリカ出身の者であるが，彼らはアリファナに接する機会も多く，たばこの喫煙動作からそれほど抵抗なくマリファナを吸ってみたものと考えられる。帰国生が多くいる環境なので他の高校とは比較できないが，一般生の中でも入手経路は不明であるがマリファナの経験者もいるため，なお一層の禁煙教育に加え，麻薬などに対する薬物教育に日本でも真剣に取り組んでいく必要があると思われる。

また現在の状態の中で，喫煙群には「親しい異性の友達がいる」という項目に非喫煙群と比較して有意差がみられたが，喫煙との関連は今後検討したい。

5）その他の生活環境の影響

「父親のしつけのきびしさ」は女子の喫煙群に影響している。父親のしつけのきびしい方が喫煙者が多いが，これは親に対する反発かもしれない。しかし母親のしつけのきびしさには差はみられなかった。また学校生活への充実度も喫煙に影響しており，男女とも喫煙群の方に「充実している」と答えている者が少ない。さらに「家族で話し合う機会は多いか」という問いに対して，話し合う機会が多い家庭には男女とも喫煙者が少ない。

表34　生活環境　(%)

区分 / 項目	海外帰国生											
	男子			女子			男子			女子		
	N群	S群	P	N群	S群	P	帰国生	一般生	P	帰国生	一般生	P
父親のしつけはきびしい	44.3	52.9		40.9	58.3	※	46.2	28.0	※※※	42.3	38.6	
母親のしつけはきびしい	45.7	50.6		51.0	44.4		46.7	34.1	※※	83.5	82.4	
学校生活は充実している	63.3	50.6	※	67.0	44.4	※※	60.4	56.7		65.6	69.9	
家族で話し合う機会は多い	50.2	47.7		64.0	47.2	※	49.5	52.7		62.9	57.0	
活動的な方である	57.8	78.8	※※※	62.2	80.6	※	62.8	63.8		63.7	63.0	
ひどい絶望感をもつような出来事にあったことがある	47.6	65.9	※※※	64.2	77.8	※	52.1	52.7		65.1	48.4	※※※
自分の寿命や死因を予測したことがある	31.6	50.0	※※	35.5	50.0	※	35.9	45.0	※	36.7	34.7	

「ひどい絶望感をもつような出来事にあったことがある」,「自分の寿命や死因を予測したことがある」という項目は，いずれも喫煙群と非喫煙群間に差がみられ，喫煙群の方に多くみられる。また一般生と比較すると，帰国生の方に「ひどい絶望感をもつような出来事にあったことがある」という者が多い。これらは帰国生の女子に多くみられるが，女子の場合，精神的な不安定・ストレスが何かのきっかけによりたばこに手を出し，喫煙行動に移っていくと推測される。事実喫煙者の中に「ストレス解消のため」という喫煙理由をあげている者も多い。

家庭での環境も高校生の喫煙行動に影響がある。したがって，家庭においてもたとえば「話し合う機会を多く持つ」,「しつけの内容を見直す」ことも大切であり，その他「学校生活を充実させる」などの環境作りをするなどの理解も必要であると思われる。

このように日常生活の不満も喫煙行動にいく一因であると思えるが，今後詳細に検討する必要がある。

(3) 喫煙経験と習慣化の要因分析

喫煙経験と習慣化について数量化理論Ⅱ類を用いて解析を行った。

表35は喫煙経験と習慣化について偏相係数で示してある。喫煙経験についてみると友人による影響が強い。また性別による差がみられ，男子生徒で経験する確率が高い。そして小学校から高等学校までの禁煙教育は喫煙経験とほとんど関係がみられない。このことから，これまで受けた禁煙教育が必ずしも喫煙（経験）の阻止の役割を果していないことがうかがえる。

また喫煙者のうち，喫煙習慣についてみると，性別による差はもちろん大きい。これは男子生徒

表35　喫煙経験および喫煙習慣に対する各要因の影響　（偏相関係数）

項目	経験	習慣	項目	経験	習慣
性別	.17	.37	高校の禁煙教育	.06	.22
学年	.08	.08	一般生・帰国生	.09	.13
居住地	.08	.21	タバコの害の知識	.12	.12
同居者	.09	.26	自分の勉強部屋	.06	.02
通学方法	.09	.10	運動部	.02	.17
父親の喫煙	.13	.30	小学校の先生の喫煙	.03	.21
母親の喫煙	.15	.25	中学校の先生の喫煙	.07	.19
友人の喫煙	.29	.26	高校の先生の喫煙	.08	.21
小学校の禁煙教育	.02	.11	家庭のしつけ	.08	.06
中学校の禁煙教育	.04	.21	生活指導の厳しさ	.13	.10
学校生活の充実	.10	.14			

が習慣化しやすいというよりも，女子生徒で習慣化しにくいため相対的に男子生徒が習慣化する傾向にあるという分析結果であった。

喫煙経験では友人の影響が強かったが，習慣化に対してはそればかりでなく多くの要因が考えられる。父親・母親の喫煙，居住地，同居者，中・高校の禁煙教育，小・中・高校の教師の喫煙などの影響が大きくなる。この中で同居者の影響というのは帰国生特有の要因であり，両親が海外在住などで親戚宅，寮などから通学していることが影響している。その他，中学校の禁煙教育，中・高校の教師の喫煙なども帰国生特有の要因であった。また禁煙教育は喫煙経験とはほとんど関係なかったが，習慣化の面に関しては影響が大きい。このことは海外で受けてきた喫煙と健康についての保健教育（必ずしも保健という教科ではないが）の成果が表れているものと考えられる。

Ⅳ．むすび

海外帰国生の喫煙行動について，喫煙群と非喫煙群にわけて比較検討した結果，以下のことが判明した。

1）海外帰国生の喫煙経験率は男子25.1％で，学年別では１年生21.3％，２年生20.9％，３年生39.6％であった。女子は7.3％で，学年別では１年生4.8％，２年生8.0％，３年生10.4％であった。出身校別では，日本人学校出身者に多く，また一般生と比較すると女子にやや多い。喫煙経験者のうち男子の3/4，女子の1/2が現在も喫煙している。

2）喫煙は中学３年・高校１年時に，好奇心や友人の勧めで始める者が多い。また喫煙開始後３ケ月未満で2/3の者が常習化しているが，常習化への期間は以前に比べ短くなってきている。喫煙の理由は「ストレスが解消し気持が落着く」に加え，「タバコがうまい」というたばこを嗜好品として認識している者も以前に比べ増えてきている。

3）喫煙者の多くはたばこは有害であると認識してその害を気にしながら吸っており，半数近くは有害なので止めたいと思っている。健康面への悪影響は半数近くが訴えている。

4）喫煙者グループには周りで喫煙している者が多く，自身の喫煙が抵抗なく開始できる環境にあり，とくに父親（女子のみ）・家族・身近な友人の喫煙環境が自身の喫煙に大きく関与している。また同様に学校の教師の喫煙も影響している。そして日常生活の不満や精神的な不安定も影響している。

5）禁煙教育はことに非喫煙群に効果がある。一方，喫煙群はたばこの害には興味があるので，教室での学習に視聴覚を加えて行うと効果がある。中学校の授業の方法が喫煙に影響しているので，学習内容の充実によっては効果があるといえる。また禁煙教育の有無は喫煙の経験には関係がなかったが，習慣化には影響が大きい。

6）喫煙群は喫煙に対して寛容であり，非喫煙群は厳しい。しかしそれはたばこに対する生理的

嫌悪感であり医学的な喫煙の害には関心が低い。

7）喫煙に関連する行動として，飲酒・夜ふかしなどの問題行動が多い。またマリファナの経験者もみられた。

8）帰国生の特有の現象として喫煙の要因の中に同居者の影響がみられた。

禁煙教育は喫煙が開始される前が一番効果がある。喫煙の開始時期を考えると，喫煙年齢の低下が明らかな今日，早い時期に禁煙教育を行なうことが望ましいといえる。しかしながら喫煙者の状態や学習の内容によっては高校においても効果があるので，今後内容の検討が必要であると考えられる。

喫煙の習慣形成にはまわりの環境が大きく関わっている。ことに女子において，家庭の役割は大きく家庭環境の改善も重要である。非喫煙群はたばこに対して無関心な者も少なくない。したがってその点を考慮した学習内容が必要である。

帰国生が海外で受けてきた喫煙と健康に関する保健教育が，喫煙の習慣化の防止に役立っている。海外での保健教育はさまざまであり，今後はどの方法が一番効果的であるか検討していきたい。

喫煙は未成年の時だけやめてよいものではなく，一生やめるべきものである。したがって喫煙防止・禁煙という方向に導くためには，彼らに対して繰り返し禁煙学習を行なうことにより，喫煙の害の大きさなどを認識させなければならない。したがって健康教育における健康意識の向上も大切であり，それを支える知識，知識の総合による生活点検，そして生活改善と健康行動の変革を進めていかなければならないと考えられる。

健康な身体・社会は，積極的に行動しないとやって来ない。現代社会が変るにつれて，健康に危害を及ぼすものも変化してきている。このように健康をおびやかす環境破壊や環境汚染に対して，監視し，発見し，早期に排除していくことが必要である。喫煙は，現存する健康破壊の最大の因子である。そのことを理解し，その認識に基づいて，その害を排除することが要求される。

本研究は昭和61年度文部省科研費助成金によるものである

参考文献

(1) 浅野牧茂『最後の禁煙宣言』東京，講談社，1980
(2) 浅野牧茂『たばこの健康学』東京，大修館，1985
(3) 千葉康則『喫煙の科学』東京，婦人生活社
(4) 平山　雄『グラフにみる喫煙の有害性』中外医薬，36：386，1983
(5) Ikard F.F., Green D.E., Horn D., *A scale to differentiate between types of smoking as related to the management of affect.*, Int. J. Addictions, 4(4), 649-659, 1969.
(6) 伊藤雅夫『高校生に対する禁煙教育にありかたについての一考察』昭和57年度健康づくり等調査研究報告書「喫煙と健康に関する調査研究」，p. 31，1983.
(7) 川畑徹，高橋浩之ほか『高校生の喫煙行動および喫煙に対する態度と知識』東京大学教育学部紀要，

24：181，1985.
(8) 禁煙教育をすすめる会編『禁煙教育の手引』東京，学事出版，1985.
(9) 厚生省編『喫煙と健康』東京，保健同人社，pp. 7-12，1988.
(10) 前出(8)，pp. 15-28，1988.
(11) 日本専売公社管理調整本部総務課監修『専売統計要覧』東京，専売弘済会文化事業部，1985.
(12) 日本たばこ産業株式会社『昭和60年全国たばこ喫煙者率調査，調査結果の概要』1986.
(13) 日本たばこ産業株式会社『昭和61年全国たばこ喫煙者率調査，調査結果の概要』1987.
(14) Russel M.A.H., Peto J., Patel V.A., *The Classification of smoking by Factorial Sturacture of Motives.*, J. Royal Statistical Society, A 137 (Part 3)，313-332，1974.
(15) 鈴木　明『大学生の喫煙に関する調査研究～喫煙状況と喫煙認識～』聖学院大学論叢，第1巻，p. 147-161，1988.
(16) 鈴木　明・岩井浩一『海外帰国子女における保健行動に関する研究―喫煙行動の要因について―』第32回日本学校保健学会発表抄録，p. 182，1985.
(17) 富永祐民ほか『高校生の喫煙行動の学校格差の規定要因』第35回日本学校保健学会発表抄録，pp. 147，1988.
(18) World Health Organization, *IARC Monographs. on the Evalution of the Carcinogenic risk of Chemicals to Humans.* Tabacco Smoking, 38：314，1986
(19) WHO, *Controlling the Smoking Epidemic Report of the WHO Expert Committee on Smoking Control*, Technical Report Series，636：87，1979
(20) WHO, *Smoking and its' Effects on Health Report of a WHO Expert Committee*, Technical Report Series，568：100，1975